

平成22年5月31日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：%##*～2009

課題番号：19790816

研究課題名（和文）高機能広汎性発達障害の成人に対する就労支援と精神科
リハビリテーションに関する研究研究課題名（英文）Research on job assistance and psychiatric rehabilitation in
high-functioning adults with pervasive developmental disorders

研究代表者 岡田 俊(OKADA TAKASHI)

京都大学・医学研究科・講師

研究者番号：80335249

研究成果の概要（和文）：

高機能広汎性発達障害の成人が就労・生活自立を達成した割合は、受診当初10%に満たなかったが、その後の支援で半数程度にまで上昇した。転帰予測因子の検討から、発達障害の早期発見、教育における適応支援、医療的ケア、就労支援の重要性が示され、医療、教育、福祉の連携が、自立度を高めることが示唆された。加えて、障害に特異的なプログラムと既存の精神科リハビリテーションプログラムを組み合わせることで、適応が促進されることが示された。

研究成果の概要（英文）：

At the first visit, there were only 10% of high-functioning adults with pervasive developmental disorder working in public and leading an independent life. With the support, the percentage grew up to 50%. The study of outcome predictors shows that early screening, educational support, medical care, and job assistance are significant contributors. Therefore, medical care, education, and welfare must cooperate in order to support the patients. A combination of a disease-specific program and a standard psychiatric rehabilitation program shows even higher effectiveness.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,700,000	0	1,700,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	480,000	3,780,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：内科系臨床医学・精神神経科学

キーワード：

広汎性発達障害、就労支援、生活自立、併存精神疾患、リハビリテーション、デイケア、成人

1. 研究開始当初の背景

広汎性発達障害は、対人関係障害、コミュニケーション障害、限局した関心と活動といった行動上の特性によって定義

づけられる生得的障害であり、その生活上の困難さは生涯にわたり持続する。近年の研究では、広汎性発達障害の3/4が知的障害を伴わない、いわゆる高機能の広

汎性発達障害であるといわれている。

従来の広汎性発達障害の支援は、知的障害がある、あるいは、コミュニケーション障害が中等度以上認められる児童を中心に構築されてきた。しかし、近年の研究では、高機能者ほど診断が遅れ、また周囲から障害特性に基づく理解や援助を受けられず、結果として、自己肯定感の低下や不適応状況に対する情緒的反応を来しやすく、青年期以降に精神医学的問題を来しやすいことが指摘されている。加えて、社会構造や価値体系が複雑になるにつれ、高機能広汎性発達障害の成人は不適応を呈しやすく、いわゆるNEET (Not in Employment, Education or Training) と呼ばれる人々のなかに、高機能広汎性発達障害の成人が多く含まれることが指摘され、障害特性に応じた就労支援の必要性が認知されつつある。

平成17年4月には、発達障害者支援法が施行され、生涯にわたる支援を目的とした自閉症・発達障害者支援センターが各都道府県に設置されつつあるが、その支援の具体的方策については、まだ手探りの段階である。高機能広汎性発達障害の成人の多くが不就労、家族などに依存した生活を送っていることが報告されているが、そもそも高機能広汎性発達障害のどのような特性が就労や社会的適応を妨げているのかについての実証的データは不十分である。

2. 研究の目的

(1) 高機能広汎性発達障害の就労・生活自立の実態を調べ、就労・生活自立を可能にしている要因を明らかにする

(2) 医療機関ならびに精神科リハビリテーションにおける援助によって、就労・生活自立が可能になる群とそうならない群の決定要因を明らかにする。

(3) 就労・生活自立を阻害する要因として明らかになった精神医学的問題について、精神科リハビリテーションプログラムが果たす役割について検討し、その内容と構成について検討を加える。

(4) 就労・生活自立を阻害する要因として明らかになった精神医学的問題について、精神病理学、精神団学の立場から検討を加え、必要な臨床的ケアの内容について明らかにする。

3. 研究の方法

京都大学医学部附属病院精神科神経科に新規受診した高機能広汎性発達障害の成人を対象に、就労状況と年齢、性別、学歴、家族構成、その他の精神医学的症状の有無などの記述的データ、ならびにウェクスラー知能検査の成績との関連を調べ、就労状況に影響を及ぼす因子を検討した。加えて、その後のフォローアップにおいて、就労・生活自立が可能になった一群について、その決定要因を明らかにした。

精神科リハビリテーションプログラムについては、発達障害に特化したプログラムと、精神疾患と共通したプログラムを併せて活用し、自立度の評価（客観データ）と利用者の聞き取り（主観データ）によって、必要とされるプログラムの内容を明らかにした。

高機能広汎性発達障害の就労・生活自立を妨げる要因として明らかになった併存疾患について、個々の症例の臨床病態の把握によって、その位置づけと必要なケアについて明らかにした。

4. 研究成果

高機能広汎性発達障害のうち、就労・生活自立を達成していた者は10%に満たなかったが、医療機関等での支援を行う中でおよそ半数が就労・生活自立を達成していた。

ももとの就労・生活自立要因は、併存精神疾患のないこと、対人負荷の少ない労務内

容であった。

一方、その後の就労可能となつて者とそうでない者を有意に判別したのは、やはり併存精神疾患、就労支援の有無、引きこもりや不登校の既往の有無であり、加えて、キーパーソンとなる家族に精神疾患がある場合も有意傾向が認められた。このことは、早期発見、早期からの支援開始、教育との連携、医療と精神保健福祉、就労支援の連携があつて、就労・生活自立が可能になることを示唆していた。

精神科リハビリテーションシステムの検討では、障害に特化したプログラムがスキル獲得と連帯感の形成に有用である一方で、いったん適応が促されれば、より高い対人スキルや自尊心の形成の上で、精神疾患患者と共通したプログラムが有用であることが明らかになった。

併存精神疾患のうち、精神病状態、気分障害、パーソナリティ障害が問題となった。統合失調症との鑑別は、横断像では困難であるが、反応性の色彩があること、体系化が不十分であることによつて特徴付けられた。また、気分障害では、ごく軽度の気分変動であつても、行動化に至りやすいことが示された。また、パーソナリティ障害との併存では、現行の操作的診断基準では、「併存例」が生じうるものの、心理的な規制においては共通性は乏しいと思われ、行動様式に応じた診断の陥穽を明らかにしていた。いずれの場合も、薬物療法とともに適応を主眼に置いた支援を行うことが重要であると考えられた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計25件)

1) Sato, W., Uono, S., Okada, T., Toichi, M. Impairment of unconscious, but not conscious, gaze-triggered attention orienting in Asperger's

disorder. *Research in Autism Spectrum Disorders*. 4; 782-786, 2010 (査読あり)

2) 岡田俊 成人期AD/HDの診断と治療. 児童青年精神医学とその近接領域. 51(2): 77-85, 2010 (査読なし)

3) 木村記子, 岡田俊 ADHDとてんかんの併存例における診断と治療 児童青年精神医学とその近接領域 児童青年精神医学とその近接領域 51(2); 148-163, 2010 (査読あり)

4) Suzuki M, Takahashi S, Matsushima E, Tsunoda M, Kurachi M, Okada T., Hayashi T, Ishii Y, Morita K, Maeda H, Katayama S, Kawahara R, Otsuka T, Hirayasu Y, Sekine M, Okubo Y, Motoshita M, Ohta K, Uchiyama M, Kojima T. Exploratory eye movement dysfunction as a discriminator for schizophrenia : A large sample study using a newly developed digital computerized system. *Eur Arch Psychiatry Clin Neurosci*. 259(3):186-194., 2009 (査読あり)

5) 岡田俊 高機能広汎性発達障害の青年・成人における精神医学的問題と就労・生活自立 日精協誌 28(8); 56-62, 2009 (査読なし)

6) 岡田俊 広汎性発達障害における強迫症状 強迫性障害の研究 10, 27-38, 2009 (査読なし)

7) 松河理子, 岡田俊 抑うつとパーソナリティ障害 : 精神療法における扱いをめぐって *Depression Frontier* 7(2): 41-47, 2009 (査読なし)

8) 中東功一, 岡田俊 物質使用障害に幻覚妄想, 気分変動を併存した成人の治療経過 注意欠陥/多動性障害と双極性障害の鑑別・併存をめぐって *Bipolar Disorder* 7, 46-53, 2009 (査読なし)

9) 岡田俊 注意欠陥/多動性障害における寛解 精神科 15466-474, 2009 (査読なし)

10) 岡田俊 AD/HDの併存障害に対する治

療 臨床精神薬理 12(3) 531-543, 2009 (査読なし)

1 1) 岡田俊 注意欠陥/多動性障害の早期介入における薬物療法のリスクとベネフィット 臨床精神薬理 12(3) 417-423, 2009 (査読なし)

1 2) Okada T, Sato W, Kubota Y, Usui K, Inoue Y, Murai T, Hayashi T, Toichi M. Involvement of medial temporal structures in reflexive attentional shift by gaze. Soc Cogn Affect Neurosci. 3(1):80-88, 2008(査読あり)

1 3) 岡田俊 パーソナリティ障害と広汎性発達障害の関連性と鑑別診断 精神科 12(2):102-106, 2008 (査読なし)

1 4) 上床輝久, 岡田俊 トウレット症候群の汚言にみる強迫性と衝動性 トウレット研究会会誌 14: 33-43, 2008 (査読なし)

1 5) 岡田俊 AD/HD の神経生物学的病態 小児科臨床 61(12) 2527-2533, 2008 (査読なし)

1 6) 岡田俊 成人期におけるAD/HDの診断と薬物療法における問題 臨床精神薬理 11(4), 661-667, 2008 (査読なし)

1 7) 岡田俊 トウレット症候群と発達障害の comorbidity:強迫性と衝動性の観点から こころのりんしょう 27(1) 135-142, 2008 (査読なし)

1 8) 岡田俊 思春期における周期性精神病:診断概念とその病態 臨床精神医学 37(3) 293-296, 2008 (査読なし)

1 9) 岡田俊 パーソナリティ障害と広汎性発達障害の関連性と鑑別診断 精神科 12(2) 102-106, 2008 (査読なし)

2 0) 岡田俊 広汎性発達障害の児童・青年に対するコンサルテーション・リエゾン精神医学 総合病院精神医学 20(1) 41-48, 2008 (査読なし)

2 1) 岡田俊 高機能自閉症という「くくり」について そだちの科学 11, 27-32, 2008 (査読なし)

2 2) 上床輝久, 岡田俊 トウレット障害のコプロラリアにみる強迫性と衝動性 (査読なし)

強迫性障害の研究 9, 45-50, 2008 (査読なし)

2 3) Sato W, Okada T, Toichi M. Attentional shift by gaze is triggered without awareness. Exp Brain Res. 183(1):87-94. 2007 (査読あり)

2 4) 岡田俊 神経科学の知見による広汎性発達障害研究の最前線 児童心理, 854: 113-119, 2007 (査読なし)

2 5) 岡田俊 青年期・成人期における高機能広汎性発達障害の臨床 こころのりんしょう 26(2) 248-254, 2007 (査読なし)

[学会発表] (計 1 1 件)

1) Okada T, Toichi M. Hemodynamic changes of the prefrontal cortex due to cognitive activation in high-functioning autism. Neuroscience 2009, Oct 17-21, 2009, Chicago, USA

2) Toichi M, Okada T, Sato W. Involvement of amygdala in gaze-triggered reflexive shift of attention. Neuroscience 2009, Oct 17-21, 2009, Chicago, USA

3) 中東功一, 岡田俊, 亀岡智美 広汎性発達障害がある成人の産業精神保健:診断告知と復職支援をめぐって 第49回日本児童青年精神医学会総会 2008年11月5-7日, 広島

4) 船曳康子, 岡田俊, 十一元三 アスペルガー障害と自閉症の言語性記憶における処理水準効果 第49回日本児童青年精神医学会総会 2008年11月5-7日, 広島

5) 白井はる奈, 岡田俊 ひきこもりの青年に対するデイケアでの支援:アルバイト就労

に至った一例を通して 第48回日本児童青年精神医学会総会 2007年9月30日-10月2日, 盛岡

6) 小林希代江, 岡田俊 小脳機能と広汎性発達障害: 運動記憶と自己認知の観点から 第48回日本児童青年精神医学会総会 2007年9月30日-10月2日, 盛岡

7) 上床輝久, 岡田俊 急性精神病状態を呈したトゥレット障害の成人例 第48回日本児童青年精神医学会総会 2007年9月30日-10月2日, 盛岡

8) 岡田俊, 西井真希 高機能広汎性発達障害の成人における就労の阻害要因 第48回日本児童青年精神医学会総会 2007年9月30日-10月2日, 盛岡

9) 西井真希, 岡田俊, 高橋涼子, 常包知秀 広汎性発達障害 高機能広汎性発達障害の就労を妨げる要因の検討 第50回病院・地域精神医学会総会 2007年9月27-28日, 京都
10) 高橋涼子, 岡田俊, 常包知秀, 西井真希 広汎性発達障害 高機能広汎性発達障害の青年・成人を対象とするデイケアを通じた就労支援 第50回病院・地域精神医学会総会 2007年9月27-28日, 京都

11) 岡田俊, 西井真希, 常包知秀, 高橋涼子 精神病状態を呈した広汎性発達障害の認知特性と臨床経過 第50回病院・地域精神医学会総会 2007年9月27-28日, 京都
〔図書〕(計19件)

1) ~ Z 広汎性発達障害-自閉症へのアプローチ [精神科臨床リュミエール 19] (共著, 中山書店, 2010, 155-165頁)
2) ~ Z 精神疾患と認知機能 (共著, 新興医学出版社, 2009, 226-232頁)
3) ~ Z 日常診療で出会う発達障害のみかた (共著, 中外医学社, 2009, 161-172頁)
4) ~ Z 精神科専門医のためのプラクティカル精神医学 (共著, 中山書店, 2009, 55-1) %

5) Z 子どもの心の診療入門 (共著, 中山書店, 2009, 218-224頁)

6) Z 子どもの精神病性障害 (共著, 中山書店, 2009)

7) Z もしかして, うちの子, 発達障害かも?! (単著, PHP出版, 2009, 全255頁)

8) Z 精神科看護の知識と実際 (共著, メディカ出版, 2009, 104-114頁)

9) Z 児童青年期の双極性障害 (監訳, 東京書籍, 2009, 全202頁)

10) Z よくわかる失語症セラピーと認知リハビリテーション (共著, 永井書店, 2008, 606-614頁)

11) Z 統合失調症100のQ&A (共著, 星和書店, 2008, 315-319頁)

12) Z 一般精神科医のための子どもの心の診療テキスト (共著, 厚生労働省, 2008, 9-11頁)

13) Z 子どもの心の診療医の専門研修テキスト (共著, 厚生労働省, 2008, 37-41頁)

14) Z 子どもの双極性障害 (監訳, 東京書籍, 2008, 全590頁)

15) Z 精神医学入門 (編著, 星和書店, 2007, 全314頁)

16) Z アスペルガー障害とライフステージ (共著, 診断と治療社, 2007, 26-30, 88-95, 122-126, 140-151, 174-179, 185-188, 199-201, 216-231頁),

17) Z テキスト精神医学 (共著, 南山堂, 2007, 289-294, 296-300頁),

18) Z 知っておきたい精神医学の基礎知識 (共著, 金剛出版, 2007, 358-374頁)

19) Z わかりやすい子どもの精神科薬物療法ガイドブック (監訳, 星和書店, 2007, 全439頁)

(1) 研究代表者

岡田 俊 (OKADA TAKASHI)

京都大学・医学研究科・講師

研究者番号：80335249